

体育科教科主張

1. 体育科における学び

子どもは、運動の魅力にふれると「もっとやりたい」「うまくなりたい」という思いがふくらんでくる。思いがふくらんだ子どもは、どうしたらその運動ができるか試してみたり、自己の力量を考えながらその運動をやってみたりするなど自ら動き出す。そうして動き出した子どもは、自分の目的を達成しようと試行錯誤したり、他者と関わったりし、動きを創り上げていく。

以上のようなプロセスの中で、自己の力量、仲間、相手、その場の状況などを考慮しながら試行錯誤していくことで「自分にとって楽しい」「自分なりにできた」という感覚をつかみ「その子の運動への関わり方が変わっていくこと」が、体育科で願う学びである。

そして、子どもがこのような運動をする経験を積み重ねることで、自身の動きが変容したり、運動や仲間に対する見方・考え方が広がったりして、運動することの「楽しさ」や「喜び」を味わうことが、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育むことにつながるไปกับ私たちは考える。

2. 本校体育科部が考える『その子らしく学ぶ』

教材と出会い、運動の魅力にふれた子どもは、その子ならではの思いを表出しながら運動し始める。こうして、その子らしく学び始めた子どもは「もっと楽しみたい」「どうしたらできるようになるか」などと自分の動きを考えたり、友達のやり方を参考にしたりして動いていく。そして「こうしたら楽しかった」「こうしたらうまくできた」などと振り返り、自分の動き方をよりよくしていこうと思考する。そうする中で、子どもは自分の目的をはっきりさせたり、友達の考えを知ったりして、自身の動きを広げたり高めたりすることにつなげていく。この過程において、子どもはときとして運動に対して困り感を抱いたり、自身の「壁」と向き合ったりすることもある。そしてそれらを解消し乗り越えようと、くり返し動いてみたり、自分なりの見通しをもってこだわりながらやってみたりする。

そうして「自分なりにできた」と動きの広がりや高まりを実感したその子は、自分が創った動きを十分に発揮したり、友達に自分の動きを知ってもらったりしようとする。

このように子どもが『その子らしく学ぶ』をくり返していくことは、その子の運動への関わり方を変え、自身の生き方につながる価値観までも更新していくことになるだろう。

3. 『その子らしく学ぶ』を支える環境設定

「子どもは自らの内に『運動をやってみたい』『運動ができるようになりたい』という思いをもっている」と、とらえている。これらの思いが運動の特性にふれたうでふくらみ、子どもが自ら動き出したくなるように、「この子にこの材を」と教材選定したり、子どもと教材との出会いの場を工夫したりする。そして、その子らしく学び始めた子どもの見通しや動き方、こだわりまでもとらえていく。

子どもが運動と出会い、自分なりに考えたことや、試した中で気付いたことを、自己内対話や他者との対話、タブレットなどで表出できる機会を用意する。また、必要に応じて教師が考える視点を明確にする。そうすることで、子どもが自身の動きについて客観視できるようにし、自身で動きを広げたり高めたりしていけるようにする。

子どもが運動に対する困り感や「壁」と向き合ったとき、自分のやり方にこだわりをもって取り組んでいる場合は、かかわるタイミングを計り、解決の見通しがもてずにいる場合には、解決につながりそうな動きに子どもが出合えるようにする。

そして子どもが自分の動きを発揮できる機会として大会や発表会などの場を設定する。そうした機会を設けることは、子どもの思いをより一層ふくらめ、子どもが積極的に運動に向かったり、友達に関わったりするなどして自ら動き出すきっかけになると考えている。

これらの構想をもってかかわることは、その子が動きを探りながら自得していけるための支えとなり、『その子らしく学ぶ』を支えることにもつながる。